

チベット中世初期における

般若中観論書の訳出（上）

稲 葉 正 就

まえがき

チベット大蔵経は、もちろん長年月に亘つて幾多の学者によってチベット語に訳出されたものの集大成である。それに収められている佛教経論について概説すると、チベット古代の第八世後半からランダルマ Glan dar ma 王（在位 841—846 A. D.）の廃佛までに主として顯教経論が訳出され、中世の初の佛教復興期から以後は主として密教経論が訳出されたとしばしいわれる。佛教以外のものの訳出は中世に多く行なわれ、例えば声明（文法）の論書は中世以降に訳され、古代の訳出は未だ一つも発見できない（拙稿「チベット大蔵経のなかのインド文典類翻訳の史的考察」大谷史学第一二号所収参照）。

それでは、般若中観の経論は、もちろん顯教であるから、果して古代に訳出されたかどうかを考察してみよう。

先ず、チベット大蔵経の経部に収められている般若の部を見ると、影印北京版で No. 730 より No. 746 まで（般若の經典でない Paritta を除く）一七部の経が収められている。いまデンカルマ Ddan dkar ma 目録と対照して列挙

すると次のようである。

(影印北京版) (経名) (デンカル・芳村・Lalou 本)		(影印北京版) (経名) (デンカル・芳村・Lalou 本)	
No. 730	十万般若	No. 731	二万五千般若
No. 732	一万八千般若	No. 733	一万般若
No. 734	八千般若	No. 735	般若輯撰偈
No. 736	善勇猛所問般若	Nos. 737=760(46)	七百般若
No. 738	五百般若	No. 739	能断金剛般若
No. 740	五十般若	Nos. 741—746	一葉ほどの小経類
No. 121	般若理趣百五十	No. 173	般若戈烏釈葛
No. 160	般若心経	No. 124	般若二十五門
No. 159	小字般若	No. 172	般若一百八名号
			芳村本 No. 444; Lalou 本 No. 443

なお、デリゲ版及びデンカルマ目録の般若部には更に六部の経が収められている。それらは北京版では他の部に散在しているが、ここに補足すると次の如くである。

以上がチベット大蔵経所収の般若経類である。その中、Nos. 741—746 の六経は、僅か一葉程度の短いもので訳者名を欠き、古代の編纂であるデンカルマ目録にも見えないようであるから、訳出が中世であるものもあるかもしれないけれども、いまのところでは訳出年代を決定し難い。その他の一七経は、歴大で重要なものが多いにもかかわらず北京版に訳者名を欠くものが少くないが、デリゲ版やナルタン版を参照すると大略訳者を知ることができる。それらの訳者はみな古代の人たちであり、しかもそれらの経名はすべてデンカルマ目録に出ているから——この目録には後

代の附加があるかもしれないが——それら一七経は古代すなわちランダルマの廃佛以前の訳出と考えて間違ひなからう。そうすると、般若経類は中世の訳出と決定できる経を未だ発見できない。その点は声明の論書と全く正反対である。古代に主として顯教の経典が訳されたと一般にいわれているのは、般若経類において正しいといわねばならない。次に、チベット大蔵経の論部へ考察を進めてみよう。影印北京版によると、般若の部に No. 5184 より No. 5223 まで四〇部の論書が収められている。その中から古代の訳出と思われるものを抽出して列挙すると次のようである。

(影印北京版)

(著者名)

(論 名)

(デンカルマ・芳村・Lalou 本)

No. 5191 Haribhadra: 般若波羅蜜多優波提舍論現觀莊嚴と名づくる註

No. 517

No. 5196 Buddhacrijñana: 集頌細疏

No. 518

No. 5205 著者名欠: 般若波羅蜜多十萬(頌)広釈疏

No. 514

No. 5206 著者名欠: 聖般若波羅蜜多十萬(頌)二萬五千(頌)一万八千(頌)広釈

No. 515

No. 5214 Vimalamitra: 聖般若波羅蜜多七百(頌)広釈

No. 519

No. 5215 Kamalagila: 聖般若波羅蜜多七百(頌)広釈

No. 520

No. 5216 Kamalagila: 聖能断金剛般若波羅蜜多広釈

No. 525

No. 5217 Vimalamitra: 聖般若波羅蜜多心(経)広釈

No. 529

中觀の部には、影印北京版で No. 5224 より No. 5480 まで実に二五七部の論書が収められている。その中から古代の訳出と思われるものを抽出してみよう。

(影印北京版)

(著者名)

(論 名)

(デンカルマ・芳村本)

(同 Lalou 本)

No. 5224 Nagarjuna: 般若と名づくる根本中(論)頌

No. 574

No. 573

No. 5228 Nagarjuna: 廻諍の頌

No. 590

No. 589

No. 5229	Nāgarjuna :	根本中註無畏	No. 578	No. 577
No. 5232	Nāgarjuna :	廻諍の註〔廻諍論〕	No. 591	No. 590
Nos. 5236=5467	Nāgarjuna :	縁起心頌〔因縁心論頌〕	No. 597	No. 596
Nos. 5237=5468	Nāgarjuna :	縁起心解説〔因縁心論釈等〕	No. 597	No. 596
No. 5242	Buddhapālita :	佛護根本中論註	No. 577	No. 576
No. 5247	Āryadeva :	迷乱摧壞正理因成就		
No. 5248	Āryadeva :	手量論の頌	No. 598	No. 597
No. 5249	Āryadeva :	手量（論頌）の註〔掌中論等〕	No. 600(?)	No. 599(?)
No. 5253	Bhāvaviveka :	根本中觀註般若燈〔般若燈論〕	No. 575	No. 574
No. 5259	Avalokitavrata :	般若燈広釈	No. 576	No. 575
No. 5265	Candrakīrti :	六十頌如理の註	No. 593	No. 592
No. 5272	Cantideva :	入菩薩行	No. 653	No. 659
No. 5283	Cantirakṣita :	二諦分別細疏	No. 584	No. 583
No. 5284	Cantirakṣita :	中觀莊嚴頌	No. 579	No. 578
No. 5285	Cantirakṣita :	中觀莊嚴註	No. 580	No. 579
No. 5286	Kamalaçila :	中觀莊嚴細疏	No. 581	No. 580
No. 5287	Kamalaçila :	中觀明	No. 586	No. 585
No. 5288	Kamalaçila :	真性明と名づくる論	No. 585	No. 584
No. 5289	Kamalaçila :	一切法無自性成就	No. 604	No. 603

No. 5290	Nāgamitra :	入三身門と名づくる論	No. 605(?)	No. 604(?)
No. 5291	Jñānacandra :	三身(論)註	No. 606	No. 605
No. 5292	Ārigupta :	入真性註	No. 588	No. 587
No. 5293	Vidyakaraprabha :	中觀理趣真髓略撰論	No. 603	No. 602
No. 5306	Vimalamitra :	頓入無分別修習義		
No. 5310	Kamalaçila :	修習次第〔初篇〕	No. 607	No. 606
No. 5311	Kamalaçila :	修習次第〔中篇〕	No. 607	No. 606
No. 5312	Kamalaçila :	修習次第〔後篇〕	No. 607	No. 606
Nos. 5313=5451	Kamalaçila	入瑜伽修習		
Nos. 5328=5448 (cf. No. 905)		三昧対治分安立〔大乘大集地藏十輪經無依行品第三〕(cf. No. 81 No. 82)		
No. 5330	Nāgarjuna :	経集〔大乘宝要義論〕	No. 652	No. 658
No. 5334	Vimalamitra :	次第入修習義		
No. 5336	Çantideva :	集学論〔大乘集菩薩学論〕	No. 649	No. 655
No. 5340	Āryaçūra :	波羅蜜多集	No. 656	No. 662
Nos. 5361=5405	Nāgarjuna :	発菩提心儀軌	No. 660(?)	No. 666(?)
No. 5409	Nāgarjuna :	親友書翰〔龍樹菩薩為禅陀迦王説法要偈〕	No. 662	No. 668
No. 5410	Candragomin :	弟子に与うる書翰	No. 664	No. 670
No. 5411	Matriceta :	カニシカ大王に与うる書翰	No. 666	No. 672
No. 5413	Avalokiteçvara :	聖觀自在授与比丘善明童子書翰	No. 667	No. 673

No. 5414	Nagarjuna :	一百智慧と名づくる論	No. 659	No. 665
No. 5415	Dharmikasubhūtiḥosa :	正法念処頌〔佛説六道伽陀經〕	No. 312	No. 312
No. 5430	Parahitaghosa :	七十誓願と名づくる頌	No. 472	No. 471
No. 5433	著者名欠	聖佛隨念		
No. 5460	Jñānacandra :	瑜伽行修習義異撰説示		
No. 5463	Çāntideva :	学集頌〔大乘集菩薩学論（頌のみ）〕	(cf. No. 649	No. 655)
No. 5473	Ratnadāsa :	無辺功德讃		
No. 5474	Dinnaga :	無辺功德讃註		
No. 5475	Dinnaga :	無辺功德讃義頌		
Nos. 5476=2001	Udbhatasiddhasvamin :	殊勝讃		
Nos. 5477=2004	Çaṅkarapati :	天勝讃		

以上のほかに訳者名を欠いているものの中に古代の訳があるだろうし、わたくしの見落しもあるかもしれない。それにしても、般若の部では四〇部のうち古代の訳と思われるものは八部、中観の部では二五七部（同じ論の重複が相当数あるが）のうち五一部（中観部だけの重複を加えると五六部）しか見出せなかった。すなわち、古代の訳出として僅かに約五分の一だけをここに列挙できたに過ぎない。それでは、論においては顕教の大半が古代の訳出といえないことになる。ところが唯識の部を見ると約半数が古代の訳出であり、阿毘達磨の部では約三分の二が古代の訳出である。したがって顕教の論といっても、各部によって古代と中世との訳出の比率が異なるのである。それにしても、顕教の経が殆んど古代の訳出であるにもかかわらず、顕教の論は中世の訳出の方が少し多い。特に般若中観の論は中世の訳出の方が断然多いのである。例えば、佛教学研究者に最も親しまれている月称の中論釈の如き、またチベット佛教学に

重要な位置を占める月称の入中観論の如き、あるいは清弁の中観宝燈論や中観心論とその註思釈焰の如きは、決していちにはやく古代に訳出されたのではなく、中世初期の翻訳家の努力になったのである。更にまたチベット大蔵経の中観部にはアティーシャ小部集が収められている。このように般若中観部はアティーシャなど中世初期の学者たちによって大成されたのであるから、ここにアティーシャなど著明な翻訳家を中心として訳出の状況をたどってみよう。

一 大訳官リンチェンサンポ

ランダルマ王の廃佛以後、佛教復興期の初に出た翻訳者としては、先ず西チベットの大訳官リンチェンサンポ Lo chen Rin chen bzah po (958—1055 A. D.) について述べねばならない。チベット訳経史上において、かれをもつて「新訳 Gsar ma」のはじめとする。一説には、インド僧スムリティジュニャーナキールティ Smṛitijñānakīrti の翻訳をもって新訳のはじめとするものもある。しかしゴンポ史 (DT na 1 b; BA pp. 204, 205) に、スムリティの方が大訳官のそれより先であるように思われるが、スムリティの翻訳はチベット中央の衛藏地方で行なわれたのではなく東辺のカム地方であるから、その説を採らないという見解が記されている (スムリティについては拙稿「スムリティ著『言語の門』に説かれているチベット文法学」岩井博士古稀記念論文集所収を参照)。

とにかく、リンチェンサンポの翻訳をもって新訳タントラのはじめといわれる如く、かれは極めて多くの密教論書の訳出をなし遂げた稀に見る大翻訳者であった。数多いかれの翻訳の中には、般若中観のものも相当数見られる。先ず、経部と論部との般若の部に、(以下 N. は影印北京版による)

No. 734 八千般若の校訂 (Atiṣa と共に校訂)

No. 5189 Haribhadra: 八千般若釈現観莊嚴明の校訂 (Atiṣa と共に校訂)

があり、それぞれの奥書に、マガダ国の本と対校して改訂したと記されている。ゴンポ史 (DT ca 4 b; BA p. 249; 羽

田野 p. 263) にもそのことが記載されており、同史には更にこの二つのほかに、リンチェンサンポは二万(五千般若)明 *Ni khri snan ba* (*Vimṣati-āloka*) の校訂をもアティーシャに要望したと述べている。これはチベット大蔵経所収の No. 5185 *Vimuktisena* : 二万五千般若優波提舍論現觀莊嚴註がそれに相当し、この奥書には後述のロデンシヘラブの訳と記すのみである。

次に、リンチェンサンポの訳出を論部の般若の部の中に拾うと、

No. 5192 *Dharmakīrtigri* : 般若波羅蜜多優波提舍論現觀莊嚴と名づくる註の難語を明かにするといわれる註疏 (*Atiṣa* と共訳)

No. 5212 *Kambala* : 世尊母般若波羅蜜多撰義九頌 (*Craddhākaraavarman* と共訳)

No. 5213 *Kambala* : 世尊母般若波羅蜜多撰義九頌精釈 [聖佛母般若波羅蜜多九頌精義論] (*Kaṇalagupta* と共訳)

があり、同じく中觀の部には、

No. 5244 *Āryadeva* : 肢分と名づくる論 [掌中論等] (*Craddhākaraavarman* と共訳)

No. 5245 *Āryadeva* : 肢分と名づくる論の註 [掌中論等] (*Craddhākaraavarman* と共訳)

No. 5272 *Śāntideva* : 入菩薩行の校訂 (*Dharmagīrībhādra* と *Čakya blo gros* と三名でマガダ国の本と註釈と一致させて校訂)

Nos. 5307 = 5432 *Āgavaghoṣa* : 世俗菩提心修習優波提舍書 (*Padmākaraavarman* と共訳)

Nos. 5308 = 5431 *Āgavaghoṣa* : 勝義菩提心修習次第書 (*Padmākaraavarman* と共訳)

Nos. 5317 = 5456 *Jñānakīrti* : 波羅蜜多乘修習次第優波提舍 (*Padmākaraavarman* と共訳)

Nos. 5322 = 5447 *Dānaḥla* : 禪定六法安立註 (*Dharmagīrībhādra* と共訳)

No. 5332 Dharmikasubhūtiḥosa: 菩薩行要略燈寶鬘 (Prajñākara-varman と共記)

Nos. 5366=5478 Candrakīrti: 三歸依七十 (Atiṣa と共記)

Nos. 5412=5825 Amoghodaya: 無垢問答寶鬘 (Kamala-gupta と共記)

Nos. 5420=5462=5663 Vasubandhu: 七功德正説譚 (Gaṅgadhara と共記)

Nos. 5421=5664 Vasubandhu: 戒譚 (Janardana と共記)

Nos. 5422=5666 Vasubandhu: 資糧譚 (Gaṅgadhara と共記)

Nos. 5425=5669 Matīceita: 四顛倒捨譚 (Buddhabhadra と共記)

Nos. 5436=5680 Vasubandhu: 五欲功德難詰解説 (Dharmagīrībhadrā と共記)

Nos. 5453=5575 Dīnaga: 入瑜伽 (Dharmagīrībhadrā と共記)

Nos. 5458=5576 Dharmendra: 入瑜伽優波提舍 (Janardana と共記)

がある。それでは、これらの訳出はどこで行なわれたか。西チベットの法皇イシーオェ Ye ges hod は、リンチェンサンポのためにトリン Mtho ldiñ (or Tho lin) 寺を建てて住せしめた。リンチェンが八五歳のときにアティージャが招かれて来てこの寺で会い、ここで共に翻訳に従事したのであるから、アティージャと共訳のものはすべてトリン寺で訳出したと考えられる。その他のものに関しては、その奥書に訳出場所などを記していないのでよくわからない。

以上の如く、般若中観論書の訳出の数は多いが、比較的に重要なものは少い。かれの本領はやはり密教経論の訳出にあった。中世における般若中観論書の重要なものの訳出は、アティージャ及びそれ以後といわねばならない。

二 アティーシャ

アティーシャは、梵名をディパムカラシュリージュニヤーナ *Dipamkaragrijāna*、チベット訳名をペーマルメジ
 ェイシー *Dpal Mar me mdzad ye ges* といい、尊称をヂョオルヂェ *Jo bo rje* あるいはヂョオアティーシャ *Jo
 bo Atiṣa* と呼ぶ。かれの在世年代には問題があるが、ゴンポ史によると壬午 (982)——甲午 (1054) としている。
 かれの伝は既にしばしば紹介されているから、ここにはかれの訳経に関することだけにとどめる。

ゴンポ史 (DT ca 2b, 3a; BA pp. 245, 246; 羽田野 p. 266) によると、西チベット王チャンチュプォェ *Bryan chub
 hod* は佛教復興のためにアティーシャを迎えようとして、以前にインドへ研学に行っていた経歴のあるナクツォの訳
 官ツルティムギェーワ *Nag tsho Tshul khriṃs rgyal ba* (以下、ナクツォ *Nag tsho* と略称) をヴィクラマシー
 ラ *Vikramagīra* 寺へ遣わした。そこには、ギヤのツォンドェセンゲ *Rgya Britson hgrus sen ge* (以下、ツォンセ
 ン *Britson sen* と略称) が留学していた。このチベット人の両名は、アティーシャを助けて幾多の翻訳を完成したの
 である。

アティーシャは懇願の熱情に動かされ、五九歳に達していたにもかかわらず庚辰 (1040) にインドを出発し、翌辛
 巳 (1041) はネパールに滞在した。かれがチベット語へ翻訳を始めたのは出発以前、インドに在る時からであって、

Nos. 3152=5386 *Atiṣa*: 輪廻出離意と名づくる歌 (*Britson sen* と共訳、*Nag tsho* と共に校訂)

の奥書には、ヴィクラマシーラ寺で翻訳したと記されている。密教論書の中の No. 2567 多羅母三宝讚 (*Nag tsho
 と共訳*)、No. 3322 *Atiṣa*: 身口意善住 (*Britson sen* と共訳)、No. 4869 *Candragomin*: 聖多羅母天女讚真珠鬘
 (*Nag tsho* と共訳) のそれぞれの奥書にも同様にヴィクラマシーラ寺で翻訳したとある。また、

No. 5325 *Atiṣa*: 中観優波提舍開宝篋 (*Atiṣa* 及 *Britson sen* 及 *Nag tsho* と共訳)

の奥書によると、この論はナクツォに対してアティージャがヴィクラマシーラ寺で説いたものと記されている。ところで、インドではヴィクラマシーラ寺だけで翻訳を行なったかという点と決してそうではない。密教経論の No. 132 聖青衣金剛手儀軌陀羅尼と No. 3500 Nagarjuna: 同註釈はナランダ Nalanda (Nalendra) 寺でツォンセンと共訳したことがそれぞれの奥書に記されている。また清弁の重要著作の一つであるところの

No. 5254 Bhavya: 中観宝燈 (論) (Atiṅa ṇ Bṛtson sen ṇ Nag tsho と共訳)

がソームプリー Somapuri 寺で訳出されたとその奥書に記載されていることは注目すべきことである。このようにアティージャは、インドの諸寺を巡って二人のチベットの弟子と共に翻訳に従事したことがわかる。これらはもちろんインド出発の一〇四〇年以前の訳出ということになる。一〇四一年をネパールで過したアティージャは、そこでも翻訳を行なったようである。No. 4563 Indrabhūti: 吉祥障害消除と名づくる観喜天成就法 (Bṛtson sen と共訳)の奥書には、この成就法がヤムブカルタリ Yambu Karta ri (Svayambhūgartagiri?) で訳出されたと記されているが、ここは恐らくカトマンズ近郊のスヴァヤムブであらうからである。しかしこのような一葉ほどの短い成就法や儀軌は、そこで何か行なった際に必要あって訳出したまでであって、これ一つのみで翻訳に従事したとはいえないかもしれないが、とにかくネパールでの訳出と思われる奥書のあるこの成就法のことを付記しておく。

ところが、ネパールでツォンドェセンゲが死んでしまった。アティージャを助けて十余部の翻訳を行なったかが死んだのは誠に残念なことであった。したがってツォンセンと共訳しているものは、一〇四一年以前の訳出であり、主としてインドで行なったものといえる。般若の論書の中にかれとの共訳は見当たらないが、中観のものの中から拾うと、上述の Nos. 5254, 5325, 5386 のほかに

Nos. 5298=5380 Atiṅa: 入二諦 (Bṛtson sen と共訳)

No. 5333 Atiṅa: 經集撰義 (Bṛtson sen と共訳)

がある。その他の共訳はみな密教の論書であるからここでは省略する。ところが、No. 5333 は、その奥書によると、アティンシャがナクツォに対して説いたもので、ケル Ke ru の寺でツォンセンと共訳したとある。コルディエ P. Cordier は、かれの著チベット大蔵経論部目録 (III p. 324) に、この寺はメンユル Man yul のキロン Skyid groñ のアクツアル Ag tsar の丘の上にあると註記している。それが正しいならば、ネパールで死んだといわれるツォンセンがチベット内へ僅かな距離とはいえ入って翻訳したことになる。この点をどう解決するか、疑問が残る。

さて、辛亥 (1042) にアティンシャは西チベットのトリン寺へ到着した。ここでは、

Nos. 5343=5378 Atiṣa: 菩提道燈 (Dge bahi blo gros と共訳)

を著作した。これはかれの教学の基礎を示すものとして重要視され、かれの教学によって成立したカーダム派 Bkha gdams pa はもちろんのこと、後代のツォンカパ Tson kha pa (1357—1419) によって承け継がれることになる。

この論は偈で書かれているが、その最後の二句に、

「チャンチュプオエ (王) に請われて、

菩提道の所説を要略した。」

とあり、奥書にはアティンシャ自身とゲワエロトエが訳して刊定し、シャンシェン Shan shun のトリン寺で作られたとある。もちろんこれらの記述はゴンポ史などと一致し、事実と相違ない。この論に対する自註の

No. 5344 Atiṣa: 菩提道燈細疏 (Nag tsho と共訳)

は恐らく本論と同時に作られ訳出されたと思われるが、本論とこの註とが共訳者を異にするのは、あるいは同時でなかったことを示すのかもしれない。また、王の要求で、

Nos. 5349=5390 Atiṣa: 入菩薩初学道教説 (Nag tsho と共訳)

が訳出されたことがこの論の奥書に記されている。また、ゴンポ史 (DT ca 5a; BA pp. 250, 251; 羽田野 P. 263)

には、王が「わたくしはタントラとしては秘密集会を信じ、神としては観世音を信じている。」といわれたので、No. 2756 *Atiṣa* : 吉祥秘密集會世自在成就法 (*Rin chen bzang po* と共訳) と No. 2757 *Atiṣa* : 聖觀世自在成就法 (訳者名欠) と No. 2758 *Atiṣa* : 吉祥秘密集會讚 (*Rin chen bzang po* と共訳) とを著作したという記載がある。これらの論の奥書には何らこのことを記していないが、これらもトリン寺で著作し訳出されたのであろう。また No. 133 増聖如来禅定力琉璃光陀羅尼の校訂 (*Nag tsho* と共に校訂)、No. 5633 *Balacribhadra* : 尼陀那並に補特伽羅集頌 (*Gshon nu mchog* と共訳) の訳出がトリン寺で行なわれたことが、それぞれの奥書に記されている。リンチェンサンポはアティーシャに会ったとき既に八五歳の高齢であったため、アティーシャとともに衛地方へ行くことを断ったというから、リンチェンと共訳のものはすべてトリン寺で訳出されたと考えられる。その中、般若中観の論書については前項リンチェンサンポの下に列挙したからここに再説しない。

このようにしてアティーシャは三年間西チベットに駐錫して、いよいよインドへ帰ろうとしキロンまで来て西の年(1045)をそこで過した。No. 4597 *Atiṣa* : 水供物離垢書 (*Nag tsho* と共訳) はその奥書にマンユルのキロンで訳されたところのあるのはこのときであろう。もし入蔵の際にも滞在したのであればそのときのことであったかもしれない。

さてアティーシャはインドへ帰ろうとするが戦乱によって途がさえぎられていたので、遂に帰国を断念し衛地方へ行くことにした。かれは途中の蔵地方を巡錫し、衛地方のサムエ *Bsam yas* (ラサの遙か東南方) のペカルリン *Dpe dkar glin* に到った。モンポ史 (*DTca 8b*; BA p. 257; 羽田野 p. 258) によると、ここでアティーシャは、ナクショと共に、二万 (五千般若) 明 *Ni khri snan ba* (No. 5185 *Vimuktisena* : 二万五千般若優波提舍論現觀莊嚴註に当る) と No. 5551 *Vasubandhu* : 撰大乘註疏など多数の翻訳をなしたと述べている。前書については、前述の如く、リンチェンサンポと二人でトリン寺でその校訂を行なったとゴンポ史に記しているから、ここで再度校訂したものであろう。しかしチベット大蔵経所収の No. 5185 の奥書には、アティーシャの二回の校訂に触れず、後述のロデ

ンシェラブの訳出と記すのみである。それについて注意を惹くことは、

Nos. 5201 = 5873 Atiṣa: 般若波羅蜜多撰義燈 (Nag tsho と共訳)

の奥書に、これはアティーシャがサムエのルンキドゥッパ Lhun gyis grub pa の学問所において二万(五千) *zhi khri* を釈説したときに説いたという記載があることである。故にサムエでアティーシャが二万五千の釈説を行ない、その際にそれを再度校訂し、更に撰義燈を説いたと推定してよからう。ところがアティーシャの二万五千明の校訂本はチベット大蔵經に収録されず、後のロデンシェラブの訳出本だけが収録されたのであろう。さて次に、世親撰大乘論のチベット訳は、その奥書に、アティーシャとナクツォが吉祥サムエのルンキドゥッパのイクドゥッペカルリン Dbyig hdu dpe dkar glin で訳したとあって、ゴンボ史の記述と一致する。ちなみに無性釈撰大乘論(影印北京版 No. 5552: デンカルマ目録芳村本 No. 622, Lalou 本 No. 628)は既に古代に訳出されていたが、世親釈の方が却っておくれてここに訳出されて二釈が揃うことになった。またサムエで著作したという奥書を有するものに、

Nos. 5399 = 3289 Atiṣa: 超世間七支儀軌 (Gakya blo gros と共訳。但し No. 5399 には訳者名欠)がある。

それよりアティーシャは、ワントン Ban ston に迎えられてニェタン Sñe than (ラサの南方)に移った。以後かれは逝去するまでここを根拠地として、ラサへ赴いたりエルパ Yer pa まで足をのばしたりする。ニェタンでかれは再び

No. 734 八千般若の校訂

を行なった。八千般若の奥書に、低部キのニェタンナモチェ Skyi smad Gñe than na mo che でアティーシャとドム Hbrom の二人が八千般若の講説の際に大部分刊定したと記されている。ドムとは、申すまでもなくアティーシャの教学を継承して後にカードム派を開いたドムトンパ Hbrom ston pa のことである。

次に、*「トク」*のレクペーシヲラブ *Rnog Legs pañi ges rab* がアティーシャをラサへ招待した。ゴンボ史 (DT ca 9a; BA pp. 258, 259; 羽田野 pp. 258, 257) に *ཡེ་ཤེ་ལྷ་མོ་ཀོཅ་ཀོཅ་* の懇願によって、

No. 5256 Bhavya: 中観心(論頌) 註思釈焰 (Nag tsho と共訳)

を訳出し、その優波提舍として大小二つを著作したという記述がある。それは次の二つを指すのであろう。

Nos. 5324 = 5326 = 5381 Atiṣa: 中観優波提舍 (Nag tsho と共訳)

No. 5325 Atiṣa: 中観優波提舍開宝篋 (Atiṣa ṅ Brtson sen ṅ Nag tsho と共訳)

もちろん中観心論の本偈の

No. 5255 Bhavya: 中観心(論) 頌 (Nag tsho と共訳)

も、註の思釈焰とともにこのときに訳出されたに違いない。あたかもそれを証明する如く、Nos. 5255, 5256, 5324 = 5326 = 5381 の奥書にはすべてラサのツルナン Ra sa Hphrul snah 寺で訳出したと記されている。この清弁の中観心論とその註の思釈焰は、古代のデンカルマ目録(芳村本 Nos. 728, 729; Lalou 本 No. 732)に「翻訳しようとする論として *bstan bcos sgyur hphro la*」その名が記載されているように、古代には遂に未翻に了ったが、ここに訳出が達成され、これの研究がレクペーシヲラブによってサンブに伝承される(次の項を参照)。しかも訳場のツルナン寺は七世紀の初にソンツェンガムボ Sron btsan sgam po 王の妃ネパール公主によって建てられた名利である。ここに注意を要することは、思釈焰を訳出したとき、その優波提舍として著作した大小二つのうちの方が、直前に記した如く、No. 5325 中観優波提舍開宝篋であろうと思われるが、前述したようにその奥書に、これはナクツォに対してアティーシャがヴィクラマシーラ寺で説いたものとあることである。しかもこの開宝篋を訳した一人にツォンセンの名が見える。かれはアティーシャの入蔵の際に既にネパールで死んでいる。したがって開宝篋はヴィクラマシーラ寺で作られ、その訳出はおくれたとしてもアティーシャの入蔵前でなければならぬ。ラサで作ったとい

うゴンボ史の記述と矛盾することになる。思うに、既に著作し訳出してあった開宝篋を、新たに作った小の優波提舎と一対にして示したか、あるいは No. 5325 でない優波提舎を作ったかの何れかであろう。ちなみに、般若中観論書ではないが、No. 5640 Bhavya: 異部分派解説 (Nag tsho と共訳) もトゥルナン寺で訳出したことがその奥書に見える。また No. 5649 著者名欠: 比丘初夏問 (Nag tsho と共訳) は、ラサのオエチヨクゴドゥブ Ra sa Hōd mchog dños grub 寺で訳出したという奥書を有している。

アティーシャはラサより再びニェタンへ帰ってから、こんどはエルバ Yer pa (ラサの東北方) へ行った。ここでゴクのチャンチュブジュンネー Khog Bryan chub hbyun gnas の請願によって、Asanga: 究竟一乘宝性論 (影印北京版 No. 5526 に相当) をナクツォと共訳した。この訳はチベット大蔵經に収録されなかった (次の項を参照)。また No. 4839 Atiṣa: 聖六字成就法はここで著作されたという奥書を有している。

以上の如く、アティーシャは六一歳の高齢で入藏し甲午 (1054) に七三歳で逝去するまで、到る処で講述し多くの翻訳を行なったが、その足跡をたどりつつ主としてかれの訳出状況を述べた。ところで、かれの自著の訳出が極めて多いことに気づくであろう。自著の場合、かれが著作すると同時に訳出したものもあろうし、あるいは以前に——なかには若い時代に——著作したものを訳出したものもあろう。とにかくここでは訳出の方に重点をおいて述べて来たことを諒せられたい。

上述のほかに、アティーシャが訳出した場所のわからない論書が極めて多い。その中から般若中観部の論書だけを列挙すると、

- | | | |
|----------|--------------|---|
| No. 5222 | Atiṣa: | 般若心 (經) 解説 (Nag tsho と共訳) (奥書) レクペーシラプのために著作 |
| No. 5250 | Āryadeva: | 中観迷乱摧破 (Nag tsho と共訳) |
| No. 5258 | Bhāvaviveka: | 撰中観義 (北京版は Nag tsho の单独訳となっているが東北目録 No. 3857 では |

Atiṣa ṽ Nag tsho ṽ 共記)

- Nō. 5267 Candrakīrti : 五蘊論 (Nag tsho と共記) (奥書) Tshans pañi bhyun gnas 寺 (ゑ) と共記
- Nō. 5280 Gser glin Dharmapala : 入菩薩三十六義略撰 (Nag tsho と共記)
- Nō. 5281 Gser glin Dharmapala : 入菩薩行撰義 (Nag tsho ṽ 共記)
- Nōs. 5323 = 5389 Atiṣa : 一念優波提舍 (Nag tsho と共記)
- Nōs. 5338 = 5464 Gser glin Dharmapala : 集學現觀 (Nag tsho ṽ 共記)
- Nōs. 5342 = 5348 = 5385 Atiṣa : 菩薩行略教訓 (訳者名欠)
- Nōs. 5345 = 5382 Atiṣa : 心髓撰集 (Tshul khrims bhyun gnas と共記)
- Nōs. 5346 = 5383 Atiṣa : 心髓要決 (Nag tsho と共記) (奥書) ニマタンで著作
- Nōs. 5347 = 5384 Atiṣa : 菩薩摩尼鬘 (訳者名欠)
- Nōs. 5350 = 5391 Atiṣa : 帰依教説 (訳者名欠)
- Nōs. 5351 = 5392 Atiṣa : 大乘道成就方便語撰 (Dge bañi blo gros と共記)
- Nōs. 5352 = 5393 Atiṣa : 大乘道成就方便撰 (Dge bañi blo gros と共記)
- Nōs. 5353 = 5394 Atiṣa : 自作次第並に勸誡録 (Dge bañi blo gros と共記)
- Nōs. 5354 = 5395 Atiṣa : 經義集優波提舍 (Nag tsho と共記)
- Nōs. 5355 = 5396 Atiṣa : 十不善業道教説 (Nag tsho と共記)
- Nōs. 5356 = 5397 Atiṣa : 業分別 (Nag tsho と共記)
- Nōs. 5357 = 5379 Atiṣa : 行集燈 (Nag tsho と共記)
- Nō. 5358 Atiṣa : 經大集 (著作の状況は不明、訳出については後述のニマタクの項参照)

- Nos. 5364=5403 Atiḡa: 発心と律儀儀軌次第 (Dge baḡi blo gros と共訳。更に Nag tsho と共に校訂)
- No. 5368 Devaḡanti: 過犯懺悔儀軌 (Nag tsho と共訳)
- No. 5369 Atiḡa: 過犯儀軌 (Nag tsho と共訳)
- Nos. 5373=5401 Atiḡa: 波羅蜜多乘軌佛造作儀軌 (訳者名欠)
- Nos. 5374=5402 Atiḡa: 上師所作次第 (訳者名欠)
- Nos. 5376=5400 Atiḡa: 諷頌並に読頌前に行なう儀軌 (訳者名欠)
- Nos. 5387=2211 Atiḡa: 行歌(アティーシャは訳出に加わらず、Vajrapaḡi と Chos kyi ḡes rab との共訳)
- Nos. 5388=3153 Atiḡa: 法界見歌 (Nag tsho と共訳)
- Nos. 5398=3288 Atiḡa: 三昧資糧品 (ḡakya blo gros と共訳)
- No. 5427 Gopaḡatta: 離譚 (Dge baḡi blo gros と共訳)
- No. 5480=5688 Atiḡa: 無垢宝書翰 (Nag tsho と共訳)

がある。秘密部を加えると更に倍加する。これらの論書をアティーシャが何処でどのような動機で訳出したかを知るためには、アティーシャの伝記書やゴンポ史以外のチベット史書の類をも精細に調べる必要があり、それは今後の研究に俟つ。

ここに付け加えておきたいことは、翻訳に従事したアティーシャは既に高齢であったから、どの程度までチベット語に通達していたか疑問なしとしないことである。とにかく、翻訳はナクツォとツォンセンの努力に負うところが多いことは疑いない。後者は不幸にもアティーシャの入蔵途中にネパールで死んでしまったので僅か十余部しか訳出できなかった。しかし前述の如く、かれがインドのソーマプリー寺で清弁の中観宝燈論の訳出に協力したことは意義ある業績といわねばならない。一方、ナクツォはアティーシャの臨終近くまでお供をしたから共訳した論書の数は非常

に多い。かれがアティージャと共訳した般若中観論書は既に上述した通りであるが、アティージャ以外の人と訳出したものを列挙すると、先ず般若部にナクツォ訳として、

No. 5188 著者名欠：二万五千（頌）般若波羅蜜多 (Shi ba bzang po と共訳)

がある。これは北京版には著者名を欠いているが、東北目録 No. 3790 にはハリバトラ Haribhadra 作となっている。この奥書に、ネパールのヤムブ Yambu [= Svayambhu] のソナムギンジュン Bsod nams rgyun hbyun [= Pun-yadharodaya] 寺で訳出したとある。次に中観部にナクツォ訳として、

No. 5261 Candrakīrti : 入中観論頌 (Kṛiṣṇapāṇḍita と共訳)

No. 5327 Prajñāmoṣa : 中観優波提舍註 (Prajñāmoṣa と共訳)

No. 5331 Ratnakaraṇṭi : 經集疏宝光莊嚴 (Nag po hi shabs と共訳)

がある。月称の入中観論頌は、後述する如く、後にニマタク Ni ma grags によって校訂されるが、とにかくナクツォによって月称の重要論書の一つに手がつけられはじめたことは事実である。

以上要するに、アティージャとその二人の弟子ナクツォとツォンセンの功績は大きい。なかでもチベット訳経史上において特筆すべきことは、清弁の重要論書である中観宝燈論と中観心論註思釈焰の訳出である。これは古代からの課題を果したといえる。

ところが、一方、月称の重要論書に関しては、漸くナクツォが入中観論の本頌を訳出したが、入中観論とその疏や有名な中論釈の訳出にまで到らなかった。これらの訳出は更におくれることになる。(未完)

BA G. N. Roerich : The Blue Annals, Calcutta, I 1945.

DT Deb ther sion po.

羽田野 羽田野伯猷「カードム派史」(東北大学文学部研究年報五号所収)

般若中観部の経論はわかり易くするために特に行を改めて掲出した。